

わけあってセックスが できない番たちの 解禁日

よるばん

「二十歳になるまでは、性行為はしないこと。項もそれまでは噛んではいけない。それが同棲の条件だ」

大学に入学するタイミングで恋人の祐一と同棲したい、と告げた時、父は突然のことにとてもショックを受けていた。

透に恋人ができたことは、透に纏わりつく祐一のアルファの香りで気づいていたようだ。

だけど卒業してすぐ同棲すると言い出すとは思わなかったらしい。

父は堅い表情を浮かべながらも無下に拒絶することはない、
「成人するまではセックス禁止」という条件をつきつけてきたのだ。

「え！そんなあ」

親から性行為に関して口を出される恥ずかしさもありつつ、透は反論した。

同棲という二人きりの空間で、我慢なんかできるはずがない。

おまけに二人はお互いに惹かれあってどうしようもない運命の番で、一緒にいるだけで昂ってしまう時もある。

「何もずっとダメだと言っているわけではないさ。セックスをするっていうことは、妊娠してしまうこともあるって

ことだぞ。だからせめて二十歳まではダメだと言ってるんだ。」

「でも…」

「これが聞けないならこの話は聞かなかったことにするしかないよ」

どうやら父は全く譲歩する気はないらしい。

「それは挿入以外は大丈夫ということですか？」

焦る透とは反対に、祐一の声は至って冷静だった。

「なんでそんなに落ち着いてるんだよ！祐一は俺とできなくてもいいの？」

「よくないさ！だけどお前と一緒に暮らせないほうが嫌だ」

二人は付き合い出して半年近くになる。出会いから数えると約一年。

だけとお互いに触り合いをしたことはあってもまだ挿入はしたことがなく、三ヶ月に一度のペースで訪れる透の発情期期間も会わないようにするというルールを設けていた。

それはまだ高校生である透を気遣ってのことだったが、発情期中は抑制剤を飲んでいてもやっぱり祐一を求めてしまう。

その強い衝動を押し殺しながら乗り越えてこれたのは、「卒業したら一緒に住もう」という祐一との約束があったからだった。

同棲すればたっぷりと時間があるし、それを楽しみにしていたのだ。

「もちろんできないのは辛いよ。でも透と暮らせるのをずっと楽しみにしてたんだ。だから二十歳までは我慢してみせるよ。一緒に頑張ろう？」

そう言って祐一は透の手をギュッと握った。

一方で透はその約束を守りきれ自信が全くない。

発情期になると理性も思考もどろどろになって、ただ祐一とセックスすることしか考えられなくなってしまう。

我を忘れてしまう感覚は、とても自分自身でセーブできるものではない。

「挿入以外なら...まあ。我慢しすぎもよくないだろうし...」

しゅしゅといった表情の父に、恨めしい気持ちが募る。ただここはこっちが引かないと同棲自体も叶わないかもしれない。

「二十歳になったら...噛んでくれる？」

「もちろん。お前以外にありえない」

当たり前のように言い切った祐一の言葉に、この人が運命の番でよかったと改めて思う。

透だって祐一以外はありえない。

「...わかったよ。二十歳までは我慢する」

そんなこんなで始まった夢の同棲生活は、新婚のような甘さが半分、有り余る熱を無理やり押し込める辛さが半分の生活が待っていた。

「んっ...祐一、キスして...」

ベッドで抱きしめあいながら耳を舐められていた透がねだると、祐一の唇が降ってくる。

お互いの唾液を交換しながら、激しいキスを交わす。
これだけでとろけるぐらい気持ちいい。

「好きだよな、キス...」

「んっ...祐一だからだよ...」

その言葉に興奮したのか、祐一は荒々しく息を吐きながら透の下着を脱がしにかかった。

現れた白い尻にキスを落とすと、透を四つん這いにさせる。

「ここ、舐めさせて？」

「あっ！」

くちゅり、祐一が触れたそこはすでにとろとろに濡れている。オメガは感じると尻が濡れるのだ。

「この匂い、たまらない...」

そう呟いて、祐一は柔らかな臀部に鼻を埋めた。

いわく透が垂らす蜜からは、祐一を誘う濃厚なフェロモンの香りがするらしい。時には前をいじられながら何時間も尻を舐められることもあった。

誘うようにぷっくりと膨らんだそこは、まだろくに触ってもいけないのにアルファの雄を求めて赤く充血している。

そこを激しく吸ったり舐めたりされると、透はすぐにイってしまう。

べっとり纏わりついた愛液を長い舌が舐め上げた。

「あ、あ...っ気持ちいい...っ」

恥ずかしさと興奮で頭がクラクラする。秘部に顔を密着させたまま、祐一は離そうとしない。

「あ...！あっ...！あああっ！」

「んっ...」

「あっ...ああっ...！はいっちゃう...っ」

涎をたらす蜜口の弾力を確かめるように動く祐一の舌。そこから湧き上がる強い刺激に、透は腰を振りながらなんとか逃げようとした。

だけどそれは雄にとってはなんとも卑猥な腰つきで、ただ興奮を煽るだけだった。

祐一は透が逃げられないよう腰を抱え、再度蜜口に激しく吸い付く。

「アッ...ああっ...んっ.....あっ！」

「はあ...っ、早くここにもキスしたい」

そして祐一は透の臍の下あたりを撫でると、グッと力を込めた。そこはちょうど子宮のあたり。

透はカッとそこに熱が集中するのを感じて、気づけば前に触られてもいないまま達していた。

「――ああ...！」

「早いよ、透」

「んっ...！まだ出るっ...まだ...っ」

ぴゅっ、ぴゅっ...

少し小ぶりの自身の先端から飛び出た白濁でへそが濡れる。

「今想像したんだろう？俺のでここにキスされるのを...」

放出の快感に一息つく間もなく、アルファの色気たっぷりの言葉に犯され、頭が痺れたように真っ白になった。

子宮がある場所が甘くツキンと痛んで、気づけばまたぴゅっと吐き出しながら祐一の手を汚してしまう。

「クソッ...！エロすぎる」

その様子に祐一は切迫した声を出すと、透が吐き出した精液を自分のペニスに塗りつけた。

いまだに達した余韻から抜け出せない透を視姦しながら、夢中になって自身の雄を抜く。

くちゅり、くちゅり。

テカテカと濡れたペニスが祐一の手の中で大きさを増し、祐一が手を動かすたびに赤く腫れ上がった亀頭が手筒から顔をのぞかせる。

祐一はどこかぼうっとした目つきでそこから視線を逸らすことができず、無意識に唇を舐めた。

――祐一のそれが欲しくて欲しくてたまらない。

自分の性器から甘い匂いがしているのならば、祐一のものからもたまらない匂いがするのだ。

「うっ...あっ！」

やがて祐一も呻きながら白濁を透の尻に吐き出した。
ぶわりと立ちのぼる、濃い雄の匂い。

「はあ...あ...」

祐一は達したはずなのに萎えた様子もないまま、今度はその匂いをマーキングするようにペニスの先端を透の乳輪にすりつけた。

「ん.....エッロい乳首...」

そして堪らなくなったのか、ちゅうっと乳輪ごと吸い付く。

「ああっ...」

気持ちいい。気持ちいい。

発情期でもないのに、透はもうそれしか感じるできなかった。

「透、透...早くここに入りたい...」

これまで散々舐められたせいでぷっくり膨らんでしまった乳首を甘く噛まれながら、祐一の指が中に潜り込んでくる。

そこはすでに甘くとろとろになっていて、柔らかく祐一の指を締め付ける。

ここでペニスを締め付けられる想像をして、祐一は低く呻いた。そしてめちゃくちゃにそこをかき回す。

グチャグチャグチャ...！

「あぁっ！...あっあっ...ああ！」

中の浅いところにあるしこりを押しつぶすようにされるとたまらない。

「ダメ...ダメ...！」

「中があついな...どうしてダメなんだ？ここ、透の好きなところだろ？」

「あっ...、あっ...！すぐにイッちゃうからダメ...」

そう言っている間も透の小ぶりのペニスから勢いのない精液が漏れ出ていた。甘イキが止まらないのだ。

「ずっとイッてるな？今度、ここにペニスリングをつけてみようか...」

「んっ...ペニ...？何...？」

「ペニスリング。透のここにつけて、簡単に射精しないようにするんだよ」

そう言って祐一は透のペニスの先端を指で軽く弾く。

「ひ...！」

もう一方の手はいまだに後ろに埋められていて、両方の刺激に耐えかねた先端からまた少量の白濁が散る。

その様子をからかうように笑い、祐一は中をいじっていた指を一度引き抜いた。

自分の愛液でテラテラと卑猥に濡れた指が目の前に晒される。

「こんなに濡れてる」

「や、やだ...」

こうやって透が恥ずかしそうにすると興奮するのか、祐一は時々こうして透をからかったりするようなそぶりを見せる。

「俺の匂いを中にもつけないと」

そして濡れた指を舐めると、さきほど自分が出した精液を掬い取り、透の秘部に押し込むように塗りつけた。

再び指が侵入してきてかき回される。

グチャグチャグチャ...！

「あっあっ...ああ！」

その刺激に悲鳴のような声が漏れた。

中に刷り込むように動く指が、透の感じてたまらない場所を押し上げる。

「あっあっ...！ イッちゃう...！」

これだけでも気持ちいいのに、祐一は追い討ちをかけるように透の耳元で囁いた。

「想像して...ここを俺のペニスで突かれるの。ここが俺のでいっぱいになるまでいじめるから」

「あっ...ああ...っ！ イクッ...！」

甘い言葉に犯された瞬間、意識が遠のくほどの快楽が弾けた。ビクビクと痙攣しながら祐一の指を締め付ける。

透の呼吸が落ち着くのを待つ余裕もないまま、祐一は透の唇に吸い付くと、散々捏ねられてぼってりと熱をもった入り口にペニスを擦り付けるように腰を振った。

お互いの腰を密着させながら揺れる様子は、遠目に見ればまるで挿入しているようにも見えた。

「んっ...んんっ...」

透の口腔を犯しながら密着すると、何もかもがどうでもよくなって、一つに溶けていくような感覚になる。このまま中に挿れて、孕むまで腰を振って犯したい。